

見ごろコロラド

第一日目

May 21 2009

メモリアルディで、三連休になるのですが、日本への帰国を前にバケーションをとり、五連休にした。これまで、コロラドには何度か尋ねたことがあるが、いずれもロッキーマウンテンのナショナル公園を走り回ったものばかり。地図をよくよく見たら、コロラドには四つのナショナルパークがあるが、これまで、その中のひとつしか行っていないことが分かった。これは、近くにあっけかえって行くチャンスがなかったもの。これでは、もったいないと思い切って残りのナショナルパークを訪ねる旅を計画したわけ。

コロラドが隣の州と言っても、リンカーンはネブラスカの東のはずれ、横に長い州の 300 マイルはしり、そして、コロラドを 200 マイル走らなければロッキーにたどりつかない。この 500 マイルを走るには、インターステーツを利用すれば、一番早いわけで、今回の初日は、ひたすら、このルートを走ることにした。しかし、それにしても、この 500 マイル、時間に



単調そのもの、インターステーツ

して、八時間かかる。インターステーツでは、その八時間がただ、ただ単純な景色を眺めていなくてはならない。時間を短縮するために単純な景色を我慢するのであるが、それにしても、この広大な自然が、八時間も続くと、確かに飽きてくる。

それでも、コロラドに入ればハイウェイの両脇の景色に起伏ができてくる。いよいよ山に入っていくという感じだ。



コロラドのインターステーツ

デンバーを過ぎると直ぐに上り坂になり、どんどん標高を稼いでいく。デンバーの標高がすでに 2000 メートル程度だから、ここからの山登りは、かなりの高さになるはずだ。そして、今日は、ロッキーでももっともハイウェイが高いところを走っているという Loveland Pass に挑戦の予定。ところが、ロッキーが見えてきた途端、なんと、その山の頂きは雪がかなり残っている。これは、ひょ

っとして雪になっているかも知れない。そんな心配をしながら **Georgetown** のビジターセンターによると、ここに **Loveland Pass** は **Closed** と出ている。やっぱりかとの思いで、この人になぜなんだと尋ねると、実は、一週間前に、道路の保護設備が壊れてしまって、今は通れないというのだ。雪でも、この道は、背の高いトラックは、この峠の下にある



アイゼンハワートンネルを通れないので、この峠越えをすることになっているので、除雪は完全になされている。だから、少々雪などでは何でもないはず。それが、通行止めということなので、これは、あきらめざるを得ない。ということで、今回はおとなしく、この四角いトンネルを通過することにした。

このトンネルを抜けると今日の宿泊地の **Dillon** という町に着く。峠越えに時間がかかる

と予定していたので、思いのほか早く着いた。

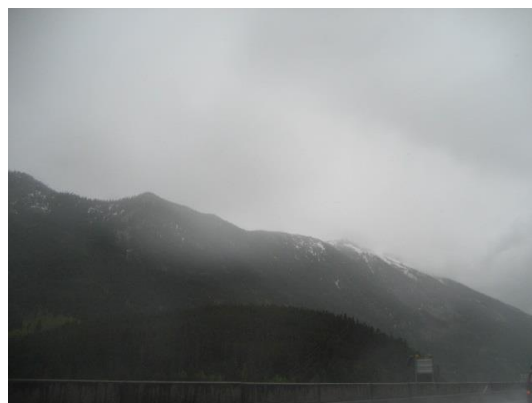
この **Dillon** の町に止まったのは、**Denver** 泊りでは、次の日の行程が長くなること。とい

コロラドロッキー越えのインターステーツ

うわけで何の気なしにここに決めたわけだが、ここについてびっくり。この高が、2,800メートルあるのだ。車からおりて、少し経つと急に息苦しくなってきた。

ここ **Dillon** の町は、**Blue** と **Snake** と **Ten Miles River** という三つの川の合流する地点で、ここにダムが作られ、現在の **Dillon** 湖ができた。この湖の水が **Denver** の町を潤わせているのだそう。そして、湖には、沢山のハーバーがあり、夏はウォータースポーツ、登山、などの避暑リゾート、そして、冬はスキー場か沢山あり、ウィンタースポーツでとてもにぎわうところだという。びっくりしたのは、この日の泊り客の中にスノーボードを持っている若者がいたのだ。ここには、まだ、冬が残っていたということ。

そして、時間にすこし余裕があったので、隣町の **Frisco** までドライブ。**Dillon** よりももっとリゾートの町として栄えている。ここに **Museum** があるというので、尋ねたが、あいにくの雨。おまけのこの博物館は、かつてここが鉱山の町として栄えたときの、当時の様々な小屋が公園の一角に沢山建てられていて、これを巡り歩くというもの。雨に濡れてはとても見学できるようなものではなく。結局、メインの建物で写真の展示をみて、終了。



コロラドロッキーには、まだ雪だ

Georgetown の博物館でも、沢山の鉱物の展示が

なされていたが、この辺りはかつて沢山の金の鉱山があったところ。カリフォルニアのゴ

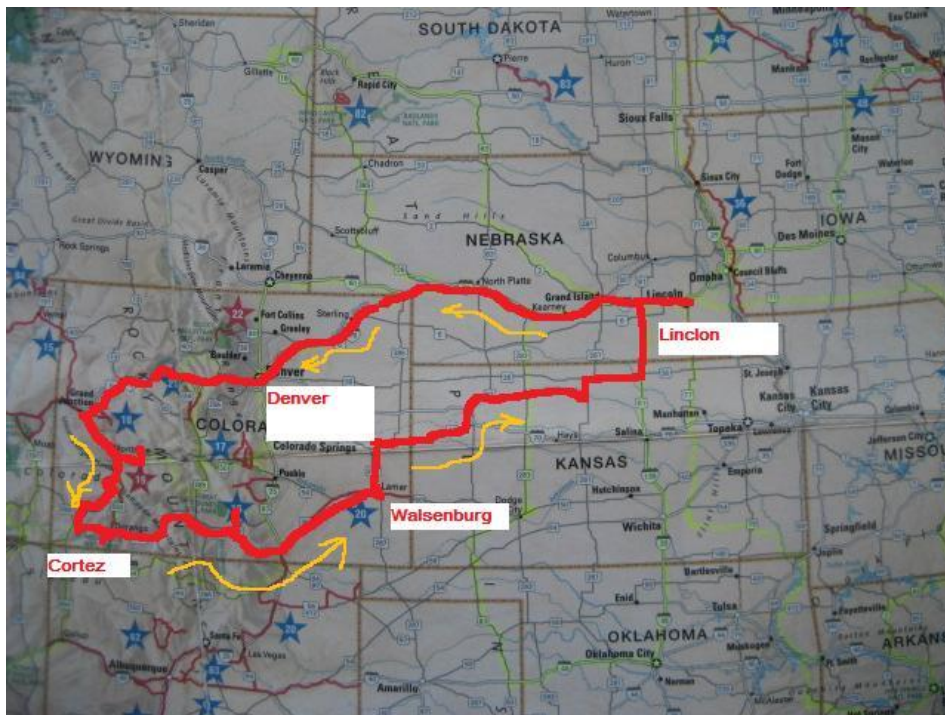
ールドラッシュの前は、ここがゴールドラッシュの中心だったというわけだ。

今晚、フリーズド・レインという天気予報に緊張しながら、ベッドに入る。

この日の行程

Lincoln ---→ Grand Island ---→ Ogallala --→ Fort Morgan ----→ Denver
----→ Georgetown -----→ Dillon

576 miles でした



今回のドライブコース 2,015 miles

第二日目

May 22 2009

夜中に寝ていたら、なんとなく、息苦しい。そうなんだ、ここは標高が 2800 メートル。冗談じゃない。これは、富士山で言えば、何合目くらいかな。そんなことを考えていたら、なんとなく頭が痛い。酒を飲みすぎたというわけでもなし。ひょっとして、これが高山病かな。

昨日の天気予報では、今日はフリーズドレインとなっていたから、道路がどんな状態か、まず、朝一番にチェック。と、幸運なことに道路は乾いているではないか。これなら安心してドライブできる。今日の行程のことを考えて、さっさと朝食をすませ、早々に出発。

まずは、Vail Pass だ。ここは、I-70 でもっとも高い峠。すこし小雨ではあったが、この峠を無事通過。とここまでは、なんのことはなかったのだが、下り始めた途端に雨が



おっ、雪山だ

雪になってきた。気温は 40° F あるので、道路が凍結する心配はない。それにしても、この雪には参った。丁度、山の西側に雪が降り積もる風向き。何とか、無事に山を下ることを祈りながら、必死にハンドルを握った。Vail をはじめてして、この辺りには、インター

ステーツの脇に、沢山のホテルが立ち並ぶ町が連なっている。Avon、Edwards、Eagle、そして、Gypsum といった町。どこも、大型のホテルが峡谷の中に広がる Glenwood Canyon だ。すごい切通し。インターステーツでシーニックドライブハイウェイの紹介がなされているこの辺りは、さすがに迫力満点。コロラド川の源流がここを流れている。これまでの制限速度



Glenwood Canyon I-80

が下げられているが、そこにパトカーが待ち構えているのだ。この日もたちまちのう

ちにスピード違反で捕まっていた。馬鹿な奴よと、笑いをこらえる。それよりも気の毒なのは、ここのレストランから出た時のこと。景観を楽しむために、一休みをし、再びインターステーツにのろうとしたら、そこにパトカーが止まっていた。合流地点でもあり、危ないではないか、なんでこんなところに止まっているのかと思い、これをやり過ごして

走る。もちろん、こんなところで捕まるのはアホやと、しばらく、バックミラーを見ていたら、なんと、私が横を通り抜けた途端にこのパトカーが動き出したではないか。「しまった。やったかな。」と思い、スピードメーターを見たが、大丈夫。「じゃー、ウィンカーでも出し間違えたかな」と、思っていたら、どうも、本線を走っていた車の後をつけているようだ。二車線だから、パトカーは私の後ろを走っている。と、急にパトカーがランプをつけた。やっぱり私かなと思ったら、実は、そのパトカーの横を走っていた車が捕まった。どうも、待ち構えていたパトカーの直前で追い抜きでもやって、スピードを上げたところで捕まったようだ。これは気の毒としか言いようがない。

Great Junction から 50 号線に入る。高原の風を受け、快適なドライブ。ハイウェイ両側には延々とした草原が続き、Delta まで、そのの偉大さがとても印象的。この辺りに来たころから雨も上がり、薄日すらさしている場所がある。コロラドのあの雪がまるで嘘のようだ。そして、Montrose から Black Canyon National Park へ。すごいね。天気が良くなってきたよ、これは不思議なこと。前回、ここを通ったときには、とてもここに立ち寄るなんていう気のゆとりもなく、フ



どこまで広がっているんだ

ォーコーナーズに向かったが、実は、ナショナルパークは、コロラドでも四つ。その中の一つなのだから、コロラドに行ったというとなるところを見ないわけ名は行かないのだ。

50 号から、347 号線に入るが、なんと、ここの入り口から、visitor center まで、7 miles も



Black Canyon National Park

ある。この Black Canyon のすごさは、その崖の迫力。ビジターセンターのテラスから短いトレイルがある。ここを下り、この崖の上に立つ。そのしたは、断崖絶壁。安全の柵はあるものの、下を除いてみれば、真っ直ぐ数百メートルの崖の上に立っているのが良く分かる。思わず、ぞくっぞくっと来る。下腹の筋肉が緩んでしまうあの宙に浮いた気分だ。一番高い崖の Painted Wall は、2250feet というから、も

のすごい。この高さ、今でもこの崖から石が崩れてい

るそうだが、その石が溪谷の下につくときには、うなりあげて粉々になり、それは、まるで、一トンのダイナマイトが爆発したときぐらいの響きとなるのだそうだ。この Canyon の名前の由来は、この峡谷が、非常に狭く、そして、深いので、太陽の光が下まで届く時間が非常に短く、いつも暗い影しか見えないということからという。崖の下を流れる川は、発見者の Gunnison の名前が付けられているが、この川は、わずか 50 マイルの間に、ミシ



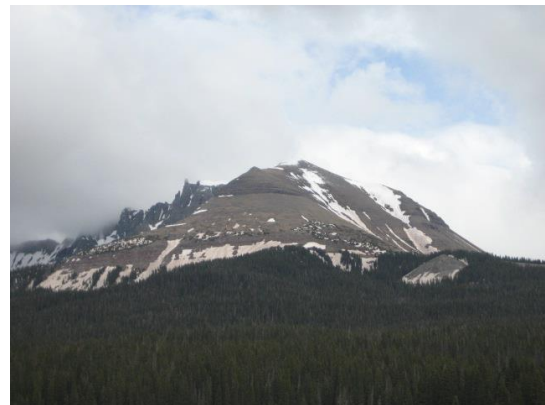
Black Canyon National Park

を広げている夫婦。ちょっと近寄りがたい空気は、二人でこの雰囲気独占しているのだ。

パンフレットによれば、ここが、ヨセミテ溪谷や、グランドキャニオンと比較されるほどのユニークで迫力満点のナショナルパークとなっていた。やはり一見の価値のある峡谷であるのは間違いなし。もっと早く来ればよかったと反省。

自然の大芸術を存分に堪能したあと、Montrose の Ute Indian Museum による。こ

のあたりはかつては、Ute 族の沢山住んでいたところ。Ute 族は、独特の模様をもち土器、そして、ビーズ細工に長けた技能を持っていたのだそう。ここで、土産を買ったら特別に 20 パーセントの値引きをしてくれた。その人、私のことを「ネイティブアメリカン」かと聞いてきた。「否、違うよ。」というと、「じゃ、日本人か」という。そして、「ありがと



う。」と今度は日本語を喋る。なんでも、日本に友達がいるのだそう。恐れ入りました。

さあ、いよいよ、今日のもう一つのイベントは Lizard Head Pass 超えだ。標高は、10,222

シッピー川がミネソタからメキシコ湾まで 1,500 マイルかけて流れる、そのときの標高差を流れきるといふ急流なのだ。その川の威力がこれほどまでに力強い溪谷を作り上げたのだ。溪谷の対壁の道さえはっきり見えるほど、狭い峡谷なのである。

すごいね。これが自然の彫刻かと思わず息を呑む。そんな溪谷を楽しんでいるのは、一人旅の私だけではない。仲良く手をつないでいる老夫婦や、二人で、この溪谷を見下ろしながら弁当

feet ある。あたして、無事超えられるか。実は、Montrose から今日の宿泊地、Cortez には、二つのルートがある。Ouray、これは、この辺りに住んでいた Ute 族の有名な酋長の名前だそうだが、ここから、Red Mountain Pass を超え、Durango に抜ける道。ただ、このルートは、以前に通ったことがあるし、かなりの遠回りになるので、今回は、62 号から 145 号へのルートを走ることにした。このころになると、山にはかなりの雲がかかっている。Red Mountain の方角は大雨であることは確か。幸いなことに、すこし西がわの、このルートのほうは、小雨ていど。そして、Telluride というから南に向かい、いよいよ山登りとい



Lizard Head Pass 10222 feet

う段になり、青空さえ見え始めた。おっ、これはありがたい。というわけで、どんどん標高を稼ぐ。そして、眼前には、雪を抱いた山頂さえ見える山がいくつか広がっている。

Lizard Head Pass の直ぐ下には湖があり、ここもリゾートで楽しむ人たちが一杯。とにかく、3000 メートルの標高ではあるが、車でこのように簡単に來ることができるので、その高さの実感がなかなか湧かないが、しばらくしているとたちまち、息切れがしてくるから、そうやって初めて、ここが、実は、す

ごい高地にいるんだと理解できる。

峠で、雪山をバックにした写真をたんまりと取り、満足、この方無し。そして、山を下り、この日の宿泊地の Cortez に入る。ところが、宿に着いたころには、また、雨が降り出していた。アメリカ中、今、雨模様なのである。ただ、私の行ったその場所は、特別晴れていたのだ。だから、不思議。そして、車からおりて、予約を確認しようとしたら、突然、猛烈なオートバイの爆音が。それも一台や二台ではない。十台以上のハーレーの大集団。なかには、三輪オートバイのもの、そして、トレーラーを引っ張っているもの、さらには、くるまにオートバイをのせて、一緒にツーリングをしているひとなど。この軍団はすごい。聞けば、El Paso から来たのだそう。どのオートバイも、二人乗り。ほとんどが夫婦。中には、孫路娘などという年配ライダーもいた。まさにゆとりだね。アメリカではとにかくハーレーに乗ること自体がシンボルステータスになっているのだ。今日は、この人たちと同宿というわけ。

この日の行程

Dillon --→ Vail --→ Glenwood Spring ----→ Grand Junction ---→ Delta
--→ Montrose ---→ Black Canyon --→ Montrose --→ Telluride --→ Cortez

420 miles でした

第三日目

May 23 2009

昨日は、ハーレー軍団が同じモーターに泊まっていました。聞けば、El Paso から 10 台前後連なつての、しかも、すべて二人乗り。みんなかなりの年配連中。奥さんと仲良く、というより、ちょっとばかりかっこよくのオートバイ野郎。かと思うと、なにか孫を連れてくるような者もいる。「私は、オートバイのシートを造っているものだ。残念ながらハーレーはない。」と言ったら、「否、三台ゴールドウィンがいるよ」と、これはうれしいこと。よくみれば、確かに黄色のゴールドウィンだ。早速、「あのシートは、私達が造ったものだ。」と、こんな具合でたちまち仲良くなる。



その連中が、朝、早く爆音をたてて、豪勢に出発。昨日の雨は今朝は上がっていた。道路も乾いている。この分だと、午前中くらいは持つかないという感じ。八時に開いているというビジターセンターにあわせ、七時に出発。

これが噂のハーレーの軍団

Cortez をでて、20 分くらいで、Mesa Verde National Park の入り口に着く。インターネット



Mesa Verde はこの山の向こうにある

ットで調べた下情報では、所要時間が一時間とあった。これでは少し早すぎるのかなと思いつつ、公園のゲートでパンフレットをもらおうと、ビジターセンターまで、20 マイルという。「えっ。20 マイル？」思わず聞きかえる。なるほど、公園の中のスピード制限を考えれば、まだこれから、半時間以上かかるわけだ。というのも、このアクセスの道路が、ものすごい。なんと、二・三百メートルはあるかと思われるような崖の上にある台地の壁に沿って、これを上っていくのだ。すげー、あの丘の上に上がるのか、

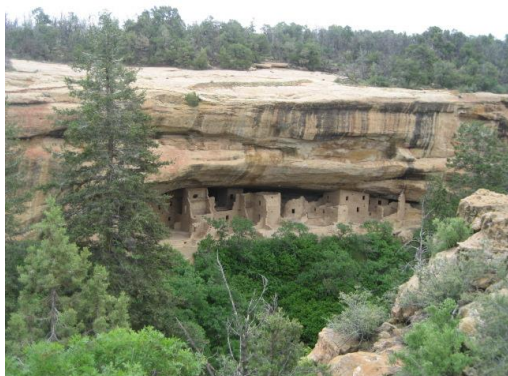
とため息をつく。誌かも、この道路、片方は崖だよ。そして、例によりアメリカでは、安全は個人の責任が当たり前、ところどころガードレールがないぜ。まだ、朝早く、下ってくる車は少なかったが、ここを下るのはかなりの緊張ものだ。

この崖の回りを取り巻きながら、どんどん標高を稼ぐ。窓を開けてのドライブは快適そのものだが、すこし肌寒い。寒いわけだ、標高が 2,500 メートルある。途中にある、Over Look からは、下界がまるで別世界という感じで広がっている。この上に古代人が住居を構えていたというわけだ。彼らはどんな思いで、この山の上に住み着いたのだろうか。まだ、この先がどんな具合かは分からなかったが、そのなぞは深まるばかり。



山に登ればこの眺望

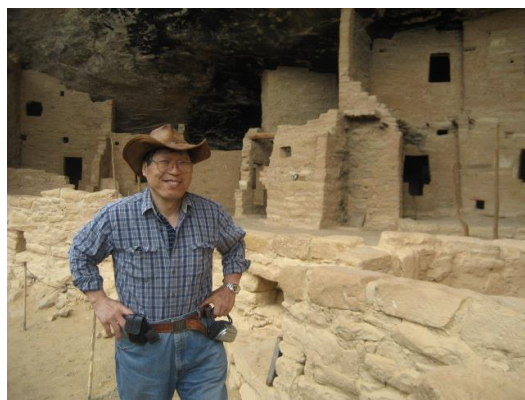
こうして、ほぼ予定通り、ビジターセンターに到着。時間は、八時ちょっと前。このナショナルパークは、いくつもの見学コースがあり、そのほとんどは、レンジャーという人たちが案内をする。とにかくここは、日本で言えば重要文化財のようなものだ。そして、ここに来る人たちは、その専門家の話を楽しみに来ているようなひとばかり。このビジターセンターは、そうした説明のあるツアーのチケットを買うところ。熱心な人たちが八時前から列を作っている。簡単なミュージアムにもなっているので、ここにより見学。私は時間の余裕があまりないということで、個人でするフリーのツアーコースを選んで、ここにいくことにした。その Tree Trail に行くには、まだ数マイルある。これが、アメリカのナショナルパークの規模のすごさだ。ここには、ミュージアムもあるが、まずは、その古代人の住居跡を見学することにした。ところが、こ



これが Mesa Verde だ

るわけには行かない。と、思い切って、このトレイルに挑戦。ここにも、レンジャーがちゃんとその場所にて、質問や、聞きたいことがあれば、事細かに説明をしてくれる。若いお姉さんであったが、なかなか活発で、資料の入ったダンボールを担いで、この崖を下っていった。その資料とは、この遺跡の説明

れがまた、駐車場とは崖を挟んで反対側にある。遠くから見学することもできるが、その迫力を感じずには、この崖を下り向こう側にいかなくてはならない。下ってからあとののぼりのことが心配であったが、ここは、ここまで来て、見ないで帰



がきで、かなり事細かな専門的な説明をしてあるもの。こんなパンフレットは彼女達の研究の成果としてまとめているのではないかと思う。

丁度、私と一緒に見学している家族連れがあった。こうしたところに来ている人は、とにかく熱心だ。学術員に、子供が仕切りと質問している。お姉さんがニコニコしながら、懇切丁寧に説明をしている模様。また、一方では、お父さんと子供連れの家族。このお父さんがにわか仕込みの知識を仕切りと披露している。学術員と議論するほど。よこで子供達が、少し恥ずかしいのか、それとも、そんなお父さんを自慢しているのか、子供達は、その会話に耳を傾けている。こんな家族の姿がなかなかいいね。

また、両親と二人の子供連れ。この家族は、どこに行っても、お母さんが例の解説書を丁寧に読んで、子供達に聞かせている。横でお父さんも熱心に聴いている。ほほえましい限り。それにしても子供達がよく聞いていること。この人たちは、とにかく教育熱心な家族なんだ。

もともとメサベルデには、数千人のインディアンが住んでいたのでは思われている。それにしても、この下界とは全く別の世界に、よくもここに住み着いたものだ。インディアンがこうした高地に住んでいるのは、安全のために下界とは隔絶した土地で生活をする必要があったことなどが考えられる。また、天により近いところでは、祈祷や星占いなどをして生活の様式を築き上げてきたことも考えられる。いずれにしても、ここは、われわれが今築いている生活の基盤となる大地とは、全くの別世界であることに、なぞは深まるばかりだ。



ふと、脇を見れば花が咲いていたね。これは高山植物なのだろうか。

勇士をたたえる踊りだ

丁度、つぼみから花が開く間際の

もの。なかなか力強さがあってよかった。これを写真に収める。果たして、この写真を誰が楽しんでくれるのかな。そんな思いをしながら、ミュージアムに入る。また、このミュージアムがすごい展示物の数。いずれもここの遺跡から発掘されたものであるが、まことに、こちらのこうした展示物の豊富なこと。これが、まさしく見せかけの文化遺産の研究所でないことを証明してくれているようなものだ。

ここで、並んで展示物を見ていたおじいさんは、一人で見学に来ているようだった。実

は、この日、まことに運の良いことにこの遺跡のイベントがあり、この地に住んでいるインディアンがバッファローダンスを披露してくれると、案内をされた。しかし、その場所がよく分からなかったら、このおじいさんが、なら、俺について来いといわんばかりに、丁寧な案内をしてくれた。あまり時間はなかったが、全くの偶然ながら、こんな文化を紹介してくれるのを見ないわけには行かない。少々を使うのは止むを得ないと、そのダンスをするセレモニーの台地まで足を運ぶ。そして、待つこと数分、いよいよ、バッファローダンスの開始。運よくこのイベントを見ることができたのは数十人の訪問客だけであつたが、われわれの待ちわびるなか、遠くのほうから、ドーン、ドーンと太鼓の音を響かせて主役達の登場となった。

このダンス、男性が三人歌い手として、ドラムをたたきながら、インディアンの伝統の歌を歌う。すると、この歌にあわせて、数人の踊り手の若い女性が独特の飛び跳ねるような仕草のダンスを始めた。その中の二人はバッファローの角突きの面をつけている。顔は全く見えない。そして、その二匹のバッファローの間で、三人の娘さん、色とりどりの民族衣装で小綺麗に着飾っている。原色の色の取り合わせは、実に周りの木々の緑、空に青さ、それに、白い雲の間でよく映えている。この踊り、実は兄弟がバッファロー



崖ッ淵を走るハイウェイ。でもガードレールがない

狩にでかけ、無事に帰ってくることと、沢山の獲物が取れることを祈る、留守の少女達の踊りだそう。若い、娘さんが 30 分近く、飛んだり、はねたりしているのだから、これはなかなか大変な踊りだ。とにかく、ここの標高が 2,500 メートルもある。こちらは歩くだけでも息が切れている。

もう少し、もう少しと思っているうちにあっという間に 30 分が過ぎてしまう。これは少し長いをしすぎた。次の目的地まではかなりの時間がかかる。すこし時間を気にしながら、山を降りようとしたら、そこに土産物屋がある。ついつい、ここも覗くことに。そして、ここの記念品を買い、土産物屋のカウンターに行ったら、なんとどうもありがとうと日本語できた。「えっ、貴方は日本人ですか」と思わず尋ねる。が、聞けば、日本に友達がいるという。でも、如何見ても東洋人のようだ。ひょっとしたら日本人だったのかも知れない。ここはなにも詮索せず、ただ、驚きだ。

これで、メサベルデの見学が無事完了。遺跡の迫力、そして、幸運なバッファローダンス。素敵な土産まで買い、たいした収穫だった。

ここから、次のナショナルパークの **Great Sand Dune** に行くには、コンチネンタルデバイド、つまり、アメリカ大陸の大分水嶺を越えなくてはならない。かなりの山になるはず。東に向かうと雨雲だ。どうも天気気がかかる。山に近づくころから雨脚が速くなった。



なんと青空だ

しかし、このコースはハイウェイが走っているところで整備は万全のはず。というわけで安心して、雨雲の様子を眺めながら、走っているとなんと、山を登り始めたころから雨が止んでいる。これまた、幸運なこと。時折顔を覗かす 3000 メートル級の山々の英姿を楽しみながら、分水嶺を越える峠、**Wolf Creek Pass** へ。山がすごい。とにかく、峠ですら根雪が残っている。山の頂きまではさらに数百メートルはあるだろう。なんと、この山道でスピード違反で捕まっていたよ。かわいそ

うに。それにしてもパトカーも良くこんなところだと思うが、つかまったほうは、全くの災難としかいいようがないだろう。

峠は 10850feet なかなかの迫力。が、なんと、そこにオートバイに乗ってやってきたいたのは、相当なご年配。すごいね。その元気。そして、峠からのくだりは雨模様。でも、下に下りて **Alamosa** あたりでは、また、陽がさしていた。これがアメリカの広さなのである。



Wolf Creek Pass 標高は、10,850 feet

Sand Dune に行くには、この **Alamosa** から 160 号を走る。東に真っ直ぐに向かうハイウェイだ。そして、驚いたことにこのハイウェイの右は真っ黒な雨雲が立ち込め、まるで今にもトルネードがタッチダウンし

そうな大雨。時折、稲妻も光っている。でも、ハイウェイの左は、日がさしているのである。そして、山がくっきりと見えている。目的の **Great Sands Dune** はここから、左に、つまり北に 17 マイルいく。運がよければこの晴れの地帯で走ることになるだろう。何とか天気もってくればよいが。もちろん、雨雲の範囲がどんどん広がっているのは、運転をしていて良く分かる。大平原の中の一直線の道、雨に追いかけられながら、必死に飛ばす。



右は嵐、左は晴れ これ、現実

そして、何とか、ビジターセンターに着いたときには、とうとう、小雨模様。雨雲に追いつかれた感じだ。でも、このナショナルパークの砂山は遠くから眺めてもなかなかの迫力。楽しむには、ここに滞在して、この砂山のまわりの自然を楽しむことらしい。沢山のキャンプ場があり、色とりどりのテントが張られていた。その数がすごいね。雨の中のキャンプ。ボーイスカウトのころを思い出したよ。残念なことにここでは雨になったために砂山に上ることはでき

なかったが、まずは、これで、目的のナショナルパークは制覇したということにしよう。

実は、ここで、砂山の回りにあるクリーク、ここでキャンプをしている人たちは水遊びを楽しむことができる。そこまで車で行くことができる道があると案内書にあったので、雨は降っていたが、これに挑戦とばかり、車で行こうとした。が、途中から舗装がしてな



い、強烈ながたがた道。岩がごつごつと道に出ている、そのうえ、途中には山から流れ出ている小さなクリークがあり、かなりの速さで水が流れている。普段はそれほど水深はないのだろうが、雨が降り出しここが急に増水。ランクルなら安全だろうが、乗用車でも試しだ行ってみると、このクリークの車を入れる。まるで、川を渡るバッファローの気分はこんなものだろうくらいに考えて。でも、このクリークを渡ると、その先が水溜りやら、道幅の狭い悪路続き。

Sand Dune National Park

そのひどさに、ここで帰られなくなるととんだことになると思い途中で断念。一車線しかない細道で何度も切り返しを U-ターンをして、引き返す。それにしても、今から思うと、帰りはもっと増水していたあのクリーク。よくぞ、無事越せたものだ。

雨がひどくなり、この大草原をこの日の宿泊地、Walsenburg に。と、今度は、行く手に虹だ。しかも、二重の虹。これがはじめてで



Sand Dune National Park

はないが、この虹がまた見事。何しろ大平原の中では、地平線から虹が立ち上る。そして、虹の天頂さえ見えるのである。日本では経験したことがない。こんな自然の戯れに付き合うことができるのが、気ままなドライブの醍醐味なのだ。虹を見ながら、時たま、すごい雨脚になり、雨雲の中に突っ込んでゆく。でも、Walsenburg につくと、またしても、青空が見えている。とにかく、アメリカの天気は一筋縄では行かないよ、と痛感したこの日のドライブでした。

この日の行程

Cortez --→ Mesa Verde ---→ Durango ---→ Pagosa Spring -----.
Woft Creek Pass ---→ South Fork --→ Monte Vista ---→ Alamosa ---→
Great Sand Dunes National Park ----→ Walsenburg

走行距離は、

第四日目

May 24 2009

おっ、今日はいい天気だ。天気予報でも、アメリカ中雨模様だが、コロラドとカンザスの州境、それにネブラスカにかけては、まあまあの天気のような。今日一日は、快適ドライブを期待できる。

ドライブの最終日は長い行程を覚悟していたので、Walsenburg から La Junta、こんな名前は見ただけで、元がスペイン領だったという感じだが、そこまでは、田舎の一本道 10 号線を走った。この道、とにかく北東に向かう真っ直ぐな道。朝が早かったが、この当たり



10 号線 両脇は見事な草原

りは、マウンテン時間ではあるが、ほとんどセントラル時間に近い。そんなわけで、朝六時半の出発であったが、太陽はかなり高い位置。その分だけ、まぶしさをしのいでくれている。ありがたい。景色を楽しむ余裕があるというわけだ。それになんて行っても車がほとんど走っていない。大草原のなか、なだらかな丘陵地帯、農場も牧場もない荒地という感じである。道路は独り占め状態。暇に任せてすれ違う車の数を数えたら、なんと、60 マイル走って 10 だけだった。こんな具合だから、

もし、ここで車の調子がおかしくなったら如何するんだろう、なんて考えたら、ちょっと身震いがしてきた。途中、車の後方に朝日があたり、景色が良いというので、U ターンしても車は来ないし、存分に写真を撮楽しむことができた。

ただ、残念だったのは、Koshare Indian の博物館。大学の敷地の中にあつたが、朝が早く、運がよければと期待していたミュージアムは閉館状態。この辺りは、あの有名なコマンチの部族の居住地。そんな彼らの生活を垣間見たかったが、残念でした。でも、旅のハプニングはとんだところにある。なんと、この町には鉄道の駅があり、なんと、そこに旅客列車が止まっていたのだ。Amtrak かどうかは定かではないが、あの豪快な、銀色をした車両が光っていた。そうか、この辺り、Santa Fe 鉄道のルートなのかも知れない。



残念でした。閉まっていました。しまった。



感激。AMTRAK だ

残念だったのは、ここをあきらめて、次の町 Las Animas に行き、ここでもたずねた Kit Carson の Museum が、やっぱりシーズンオフで閉館だったことと、まだ、時間が早いのだ。しかも、ここはマウンテン時間だ。すんなりあきらめたが、この博物館に行く途中にここにも鉄道の駅があった。あるのは駅舎だけで、プラットホームなどない。昔の西部劇に出てくる駅の面影がある。

もうひとつ、Big Timber Museum というのが、Lamar にある。今度はここをたずねたが、ここも堅くドアが閉ざされていた。仕方なく、コートハウスでも見ていこうかとダウンタウンに行き、うろうろしていたら、なんとそこにビジターセンターがあった。しかもそれは、鉄道の駅舎にもなっている。リンカーンの駅舎やビアトリスがまさしくこんな感じ。ここによったら待ち構えていたかのようにご老人が二人いて、どんな情報がほしいのかと、丁寧に挨拶してくれる。「Museum をたずねているのだが・・・」と言ったら、「今日は、どこも昼過ぎからだよ。」と教えてくれた。そうだ、今日は Sunday なのだ。この Big Timber Museum は、さしずめ、大きな丸太小屋の生活ってな所ではないでしょうか。このあたりに入植した西洋人の生活様式を紹介している。ここも、ぜひ行くようにといわれたが、開館は昼からだという。こちらはそれほど時間に余裕がないので、ここも断念。



Lamar から、北東に 70 マイルくらいゆくと、そこに Cheyenne Well の町がある。ここは、もう Cheyenne 族の領地なのだ。ここにも Museum があるはずなのだが、ここを探し当てることはできなかった。というわけで、カンザスの Fort Wallace に。ここにも Museum があ

裁判所と立派な刑務所

るはずだ。ところが、走っていて見付けた看板のとおりに行くと、とんでもない田舎道に入り込んでしまった。町もそれほど大きくないし、展示の内容も期待できそうもないので、あきらめて 40 号のハイウェイに戻ったとたん、その道路わきに博物館があった。しかも、Open となっている。これはラッキー。どうも、この博物館、最近になり、ここに移転してきたようだ。庭に立てられていた Historic Site のカンバンには、もともとはここから少し離れた場所にあった砦にあったのではないかと思う。その砦には、このの街道、これがまた、初めて聞く Smoky Hills Trails とあったが、ここを通る入植者達を保護するために騎兵隊が 300 人も常駐していたらしい。1865 年からと書かれていた。



カンザスの農場はよく整備されている

この博物館には、当時の入植者達の生活様式の紹介とともに、その当時からなのであろう生活のために使われていたあらゆるものが収集されていて、これが、また、ものすごい密度で展示されていた。前に、Belleville の町でも同じような博物館を覗いたことがあるが、規模はそこよりも小さいが、その展示品の数の多さには圧倒されてしま

う。しかも、これがどうも個人のコレクションのようであった。

ここに、貝殻が販売されていた。表示に、これは本物と書かれている。係りの人に聞いたら、この人、今日はボランティアでここに来ているのでよく分からないが、この貝は、ここで掘り出されたものではないかという。そうなのだ、ここより少し東に行ったところに Oakley という町があるが、こうした化石の立派な博物館がある。そこにも沢山の貝殻が展示されていたのを思い出した。記念にこの貝を少し手に入れた。例の、細長い巻貝なんていうのは、フロリダ辺りに言ったってなかなか手に入らないだろうから。



貴重な記念品を手に入れ、ご機嫌そのもの。そして、これでよし、と車の向きを変えたら、なんと、その少し先に、沢山の馬のトレーラーが止まっている。その先には、なんと馬場があり、そこではみんなが馬に乗って大騒ぎをしている。「えっ、あれはロデオをやっているのではないか。」これは、見ていけないわけにはゆかない。なんとか、その会場への入り口

帽子はかぶっていますが、この広さに脱帽

をみつけ、近くまでいったら、大会はまだ始



どこの博物館もやることがすごい

まっておらず、その前の練習というわけ。それにしても、その馬の数の多さにびっくり。馬を二・三匹ずつ乗せて来たトレーラーが数十台は止まっている。家族付れできている人たちのなかには、小さな子どもまでもがカウボーイの格好をして、得意気に馬の手綱を握っている。あんな小さなときから馬と一緒に生活しているんだ、と感心したり、うらやましく思ったり。それにしても、この小さな田舎町に良くもこれだけの馬が、そして、ぼちぼちと見物客達も詰め掛けてきているようだったが、近隣の人たちが集まってきているものと、少しばかりの驚き。練習の様子を写真に取り、ここは、この田舎町の良さを存分の味わった次第。

時間もだいぶ経過した。ここから、リンカーンまではまだ随分ある。コースをできるだけ北東にとり、Colby の町に向かう。その Colby の町に着いたのは、日がまだ高いとは言え 16:00 だった。まちなかを一回りして、ふと目についたのが、Museum のカンバン。案内のとおりに行くと、道を逆戻りするようではあったが、せっかくのチャンス。よし、というわけだ。Prairie Museum of Art というなかなか立派な博物館。規模もかなり大きく、そして、展示の内容も入植者達の生活用品ばかりでなく、ガラス細工、陶器、土器など工芸品、というより、美術品があり、これもなかなか見ごたえがあった。

いよいよ、時間もいい時間となった。これまでカンザスもいろいろ走ってきたが、ここから



おっ、ロデオやってる

また田舎道だが、ただの田舎道ではなく、ア

ップアンドダウンのあるかなり厳しい道路。

本当の田舎道というかんじ。まるで、ATV で

遊んでいるというのはこんな感じではないかというくらい迫力がある。そして、もちろん、対向車なんていない。ちょっとばかり寂しくなるような雰囲気だ。カンザスの田舎とはこんなものかという道をただひたすら東に向かう。途中、牧場があり、なんとここの牧場のなかで、あの子牛を放ち、これを馬に乗り追いかけて、投げ縄で止めるという、あのロ

からは、これまでに走ったことのないカウンティハイウェイの 9 号線を走ることにした。ところが、シーニックドライブウェイになっているこのハイウェイがなかなかの曲者。これ



こちらでは良く見る夕焼けと飛行機雲

デオマガいの仕事をしていたよ。全く、西部のカウボーイそのもの。生活のために実際にそんなことをしている人が現実に今でもいるんだ。と、しばらく行くと、今度は、バッファローの牧場があったね。まるでこんな田舎に入ると、あの昔の西部がまだまだそのまま残っているんだ、そんなことを感じて、夕暮れ迫るカンザスを突っ走った。

この日の行程

Walsenburg ---→ La Junta ----→ Las Aminas ---→ Lamar --→ Eads
---→ Kit Carson ----→ Cheyenne Walls ---→ Wallace --→ Colby ----→
Edmond ---→ Phillipsburg ---→ Belleville --→ York --→ Lincoln

659 miles でした。 四日間で、2015 マイルを走りぬきました。